

児玉教授の定年退職によせて

今年度は、英語英文学専攻の入学辞退者が例年になく少なかったため、50名もの新入生を迎え、クラスは、新鮮な若いエネルギーに満ちている感じがします。しかし、英語英米文学専攻といたしましては、平成12年3月末日をもって、児玉教授が定年退職されましたためポツカリと大きな空洞ができた感じで教授の存在の大きさを改めて感じている今日この頃です。本学人文学会では、論集『人文』24号を、研究・教育・管理運営など様々な面で御指導を賜りました児玉教授への感謝のしるしとして、刊行することになりました。

児玉教授は、広島大学大学院で修士号を取得され、鹿児島女子短期大学講師を経られ、昭和48年4月に本学に助教授として御着任以来、昭和56年に教授に御昇任され、27年の長きにわたり、教育・研究に御専念され、数々の顕著な業績をあげられました。

御専門の英語学の御研究面では、18世紀のイギリス小説家Henry Fieldingの作品中の語法を、OEDなどにもさかのぼって御研究され、オーソドックスな文献学の分野で御活躍され、数多くの論文を執筆されていらっしゃると思います。特にあの「小学館ランダムハウス英和大事典」に分担執筆されるなど、地道な英語学研究の模範を常に示していらっしゃいました。先生の御研究方法は常に文献学を通して「哲学」「宗教」「人間性」までも探究され、私のような英語学を科学的に考察しようとする方法論の者にとりましては、頭のさがる「人間的」な英語学研究をなさっていらっしゃいました。最近の英語学・言語学が科学的精緻を極めるような方法論になってきていることに対して、先生独自の警告を常に発していらっしゃったような感じも致しております。

また、先生は教育面でも常にエネルギッシュで、学生に英語学を教えられると同時に、人生をも示唆して下さるということで、常に大好評でした。特に「毎日新発見一つ」は、学生の創造性と学生生活のマンネリ化を避ける特効薬のような効果があったようです。

更に、本学の管理・運営面でも、学生部長、英文専攻主任教授などを歴任されていらっしゃいます。このような長年の御功績に対しまして、当然のことながら名誉教授の称号が授与されるべきですが、先生の竹を割ったような無欲主義をここでも貫かれ御辞退されたことは、私共といたしましては、非常に残念な感じが致しております。

御退職後も、児玉教授の御健康とますますの御活躍を祈念いたしますとともに、本学へのお力添えをお願い申し上げたいと思います。

平成12年5月

英語英文学専攻世話役 久木田 美枝子